論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　薩日娜

本論文は、1850 年代から 1910 年代までの期間（日本では幕末から明治期全般、中国では清朝末期に相当する)、日本と中国において西洋の数学がどのように受容されたかを、教科書・解説書などの出版、教育体制・教育機関の設立や改革、研究団体等の動向に注目することで明らかにしようとした研究の成果である。同時期の日中両国における状況が検討されているのは、両国における西洋数学の受容の特質の比較が意図されているためでもあるが、本論文の特長は、単なる比較からさらに踏み込んで、同時期の日中間に存在した文化・教育における交流が、西洋数学の受容という局面においてどのような形態をとり、それが両国における西洋数学の教育・研究の展開にどのような影響を与えたかを解明している点にある。本論文が述べるところによれば、幕末から明治初期の日本における西洋数学の受容・普及にあたっては、それに先立つ時期から始まった清国における西洋数学書の漢訳本が大きな影響を与え、日清戦争以降の清国における西洋数学の受容・普及においては、日本に倣った教育体制の清国における確立と、日本に留学した中国人学生の活動が本質的な役割を果した。本論文が主として扱うのは、西洋数学の受容という、科学史・文化史の視点から言えばやや限定された一局面ではあるが、その視野には、同時期に存在した翻訳書・教育体制・留学等を通した日中間の文化交流の全般が収められている。本論文は、このような両国間の交流が、19 世紀半ばから北東アジアに流入した西洋の文物全般の受容と普及に大きな影響を与えたことを示唆する野心的な著作であると評価できる。

本論文が取り扱った個別的な内容に関する評価は以下の通りである。

清末の中国における西洋数学書の漢訳本に関しては、中国に存在する資料が丹念に調査され、また原書を明らかにための努力も可能な限り払われている。従来原書とされていた文献と漢訳本を比較することにより、さらに新たな原書の存在を突き止めることにも成功している。清末の教育制度の転換についての分析は、先行研究に依存するところが大きいが、これが模範とした明治期の日本の教育制度について学位申請者が留学中に得た知識が生かされた記述がなされている。

幕末から明治期の日本における西洋数学の受容に関する記述は、主として日本で行われた先行研究に依存するところが大きいが、東京数学会社の活動についての分析には、修士課程以来、学位申請者が進めてきた研究の成果をみてとることができる。特に、西洋数学によって訓練を受けた人々と和算の伝統を受け継ぐ人々、および西洋数学・和算の両者に精通した人々の間に存在した、西洋数学と和算の位置や役割についての理解の相違に関しては、詳細な検討が行われている。

日清戦争後に盛んになる中国人学生の日本への留学に関しては、留学生受入の拠点となった第一高等学校の資料を用いた分析がなされており、この点は従来の研究にまったくない特徴である。学位申請者は、留学生の履歴書等を用いて、中国における数学教育、高等学校入学以前の日本における留学生向けの教育、高等学校における留学生向け教育、高等

学校卒業後の進路、留学生の帰国後の活動等を明らかにした。日本留学経験者の中には、中国における西洋型の学問の受容・普及に尽力した人物が少なくなく、数学においてもこの事実が指摘できることが明確になった。

本論文では十分に扱われず、今後学位申請者のさらなる研究の進展に期待が寄せられる課題としては、以下のようなものがある。

日本に関しては、幕末における数学教育についての記述が、主として先行研究に依存したものであるために、深い分析を伴ったものとはいえないこと、明治期全般における教育理念・教育体制の変遷についての記述が十分とはいえないこと、教育から研究への展開について論じつくされてはいないことなどが指摘される。

中国に関しては、日本において存在した和算と西洋数学の間の地位や影響力をめぐる角逐と同様の過程が、中国においても存在したかどうかの検討が十分でない点などが指摘できる。また、中国における西洋型の学会の確立や西洋型学問の研究にまでいたる受容は、本論文が扱う時期より後になって起こるため、日中の比較という点からいえば読者にはやや不満が残る記述となっている。

全般的に言えば、日中間の比較史としては、先行研究が十分に進んでいない点もあって満足とはいえない記述がなされている箇所があるものの、日中間の文化交流史という観点から見れば、新しい資料を用いた詳細な分析がなされている点が高く評価できる。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。